

現代の ことば

いなが
稲賀

しげみ
繁美

むつかしい話をする。経済活動とは何か。経済Ⅱエコノミーの語源はギリシャ語のオイコス。それは本来「家政」を意味した。日本の大学にもかつては家政学の講座や学科があったが、なぜか近年、消滅してしまった。だが家政学を女性の領分に押し込めたのが、そもそもの間違いだった。今や世界経済は、経世とも済

民とも無関係なマネー・ゲームの代名詞となった。だが金融とは元来、世の中の物資や情報流通を円滑たらしめるべく金銭を融通する手段だったはず。それが今日では、実体経済とは無縁の、無軌道な遊戯となった。

ヨットを趣味とする人種には3種類あるという。第1種は船の所有を誇るオーナー。

数値にならない 価値の復権



第2種はヨット競争で勝利を狙う競技者。だが第3種として、海原の帆走そのものに生きがいを感じる人々がある。これを比喻として金融の世界に照らしてみるとどうだろう。第1種はさしずめ株主つまりステークホルダー、第2種はマネー・ゲームに熱中する株操作の専門家だろう。これに

対して、ひたすら風と波との界面に最適の航路を探ることに喜びを見いだす人々は、実体経済に囚われた「近視眼患者」として、しばしば無能扱いされてきた。

だが、どうだろう。今や世界の金融経済は、統計数字のうえでも実体経済の数倍、推測によれば優に2桁は桁違いな怪物と化している。現実の帆走にどんな労苦があるかも弁えぬまま、バーチャル空間で金融商品をもてあそぶのが、いかに危険な賭け事であるかは、バブル経済破綻以降の数かずの経済危機が如実に物語る通りだろう。

そもそも金融商品を支える数理経済理論は、資源は無限であるとの前提から出発する。だが地球表面の極薄の生態系は、無限の重みには耐えられない。地表には高度な粉飾を施したねずみ講が跳梁跋扈している。マルクスをもじるなら、それこそが現代の麻薬であり、妖怪にほかなるまい。

経済や金融といった活動は、信頼や絆を前提とする。だが数学的に厳密な金融理論からは、信頼や絆などは放逐されてきた。信用の格付けがくせ者だったからだ。そして数値にならぬ不透明な要因は、市場の透明性には無用な

雑音として、統計からも排除される。統計に乗らない商取引の実態は、インフォーマル・セクターに追いやられる。かつての言葉なら「閩経済、退治すべき閩の領域である。」

社会の絆が放逐されるべき悪に転落し、クレジット・カードが信用の「かた」に成り代わる。透明性という善の仮面の下で、市場の側は暴走を止められない。異常増殖を遂げたこの魔物を、いかにすれば退治できるのか。知恵を絞るべき時にもはや猶予はない。

(国際日本文化研究センター 副所長、比較文化・文化交流 史)